

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第58集

枇杷坂遺跡群

SHIMOANAMUSHI

# 下穴虫遺跡 I

長野県佐久市大字岩村田下穴虫遺跡 I 地区報告書

1998. 3

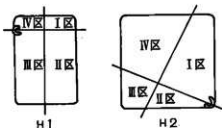
有限会社サンコー地所  
長野県佐久市教育委員会

## 例 言

1. 本書は平成9年6月30日～7月16日まで発掘調査を行った、有限会社サンコー地所の宅地造成事業にともなう埋蔵文化財調査報告書である。
2. 発掘調査は佐久市教育委員会埋蔵文化財課が担当した。
3. 本書は森泉かよ子が編集・執筆した。
4. 本遺跡の遺物は佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

## 凡 例

1. 遺跡の略号は次のとおりである。  
H—堅穴住居址，D—土坑，P—ピット，M—溝状遺構
2. 挿図の縮尺は次のとおりである。  
堅穴住居址・土坑実測図1/80，遺物実測図1/4を基本とし、異なる場合は図に明記してある。
3. 挿図中におけるスクリーントーンは以下のことを表す。  
遺構 地山断面—斜線，焼土—砂目，柱痕—砂目極細，粘土—一点  
遺物 灰釉陶器—砂目極細，須恵器—黒色
4. 遺構図の海拔標高は各遺構ごとに統一し、水糸標高を「標高」として示した。
5. 土層・土器の色調は、1988年『新版標準土色帖』に基づいた。
6. 本調査のⅠ～Ⅳ区は、下図のとおりである。



# 目次

例言

凡例

目次

## 第I章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至る動機……………1

第2節 調査の概要……………2

第3節 調査日誌……………2

第4節 調査組織……………3

## 第II章 遺跡の立地と環境……………3

## 第III章 基本層序……………6

## 第IV章 遺構と遺物

### 1. 竪穴住居址

1) H1号住居址……………7

2) H2号住居址……………11

3) H3号住居址……………19

2. 土坑……………20

3. その他……………21

## 第V章 総括……………22

引用参考文献

## 挿図目次

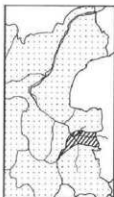
第1図 位置図……………1	第10図 H2号住居址出土遺物実測図……………16
第2図 下穴虫遺跡遺構配置図……………2	第11図 H2号住居址出土遺物実測図……………18
第3図 周辺遺跡分布図……………4	第12図 H3号住居址実測図……………19
第4図 基本層序模式図……………6	第13図 H3・H4・H6号住居址・ D3号土坑出土遺物実測図……………19
第5図 発掘区設定図……………6	第14図 下穴虫遺跡D1～D3号土坑実測図……………20
第6図 H1号住居址実測図……………8	第15図 下穴虫遺跡全体図……………22
第7図 H1号住居址出土遺物実測図……………10	第16図 集落分布図……………23
第8図 H2号住居址実測図(1)……………12	
第9図 H2号住居址実測図(2)……………13	

## 第I章 発掘調査の経緯

### 第1節 発掘調査に至る動機

枇杷坂遺跡群は佐久市北部の岩村田地区にあり、浅間第1軽石流の浸食により発達した「田切り地形」の台地上にある。北方に長土呂遺跡群・芝宮遺跡群、南方に岩村田遺跡群がある。

枇杷坂遺跡群下穴虫遺跡の東隣りの上久保田向遺跡では、区画整理事業や民間の店舗建設にともない調査され、平成6年までに40棟を越える堅穴住居址や掘立柱建物跡が検出され集落の存在が周知されている地点である。今回、有限会社サンコー地所により宅地造成事業が当地で行われことになり、試掘調査を行ったところ、平安時代の堅穴住居址6棟、溝状遺構1本と土器等が検出された。協議の結果、破壊やむを得ない道路部分の発掘調査を行い、他は埋土保存とした。



第1図 位置図



写真1 遺跡より南を望む(北より)

## 第2節 調査の概要

遺 跡 名 枇杷坂遺跡群下穴虫遺跡1（しもあなむし）（略称IBS1）

所 在 地 佐久市大字岩村田字下穴虫241-1, 外1筆

開発主体者 有限会社サンコー地所

開発事業名 宅地造成

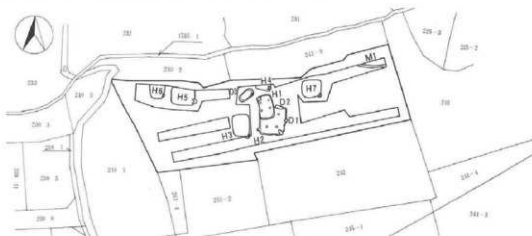
調査期間 発掘調査平成9年6月30日～7月16日

整理調査平成9年7月17日～平成10年3月31日

調査面積 500m<sup>2</sup>

検出遺構 竪穴住居址3棟（試掘調査7棟検出の内4棟は埋土保存した。）・土坑3基

主出土遺物 平安時代後葉土器・鉄製刀子と蕨・鹿の頭骨と角



第2図 下穴虫遺跡遺構配置図 (1:1,000)

## 第3節 調査日誌

H9.6.30 発掘調査開始。既に機材搬入し、重機により耕作土を除去。遺構検出する。

H9.7.1～4 H1号住居址掘り下げ、実測。

H9.7.7～16 H2号住居址・土坑掘り下げ、実測。

H9.7.9 工事中検出されたH3号住居掘り下げ、実測。

H9.7.16 発掘調査終了。

H10.3.31 現場終了後室内にて整理し報告書刊行。



写真2 調査風景

## 第4節 調査組織

発掘調査受託者 教育長 依田 英夫

事務局 教育次長 市川 源

埋蔵文化財課課長 須江 仁胤

管理係長 楠澤 慶子

埋蔵文化財係長 大塚 達夫

調査員 小幡 弘子・小林たつ江・林 美智子・星野 良子・水間 雅義・柳沢千賀子

埋蔵文化財係 林 幸彦・三石 宗一・須藤 隆司

小林 真寿・羽毛田卓也・上原 学

富沢 一明

調査担当 三石宗一・森泉かよ子

## 第II章 遺跡の立地と環境

本遺跡は佐久市北部の岩村田地区にある。浅間山麓の末端に当たり、浅間の噴出物である浅間第1軽石流の堆積地域である。浸食により「田切り」地形が発達し、本遺跡の北は10m断崖となっており、「蟹沢」田切りと接する地点である。プラン確認図を見ても住居址の北側が途切れるが、これは田切りの浸食が進み台地の一部が消滅したもので、住居址構築時は台地が今より広く、田切りは現在の幅より狭かったことがわかる。南西方向に延びる台地の両端、つまりは田切りに



写真3 下穴虫遺跡航空写真（朝日航空社 1997. 7. 14撮影）



第3図 周辺遺跡分布図 (1:25,000)

面する地点は低くなり、浅間第1軽石流の上に水性堆積層が乗っている。本遺跡も北に田切りと面していることからやや北傾斜している地点である。

周辺の遺跡について見てみよう。批坂遺跡群では隣接する北東のNo.2上久保田向遺跡1~Ⅶの調査で平安時代の中葉頃から平安時代末にかけての集落が見つかった。竪穴住居址48棟、樹立柱建物址49棟が検出され、中世後葉の土壙墓3基もあるが、同期の集落はまだない。この標高730m地点では古墳時代の住居址はなく、平安時代になって人々が住み始めた新興地域であ

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	彌	弥	古	奈	平	中	備考
1	下穴虫遺跡	岩村郡宇下穴虫						○	本遺跡
2	上久保田向遺跡	岩村郡宇上久保田向						○	平成元年～6年表調査
3	曾根新城遺跡	長土呂字新城						○	平成元年～6年表調査
4	上聖端遺跡	長土呂字上聖端			○	○	○		昭和63年表調査
5	聖原遺跡	長土呂字上聖端・新盛			○	○	○		平成元年～7年表調査
6	南下中原遺跡Ⅰ・Ⅱ	長土呂字南下中原・南下中原			○	○	○		昭和63・平成5年表調査
7	上芝宮遺跡Ⅰ～Ⅳ	長土呂字上芝宮			○	○	○		平成4～平成7年表調査
8	下芝宮遺跡Ⅰ～Ⅳ	長土呂字下芝宮Ⅰ～Ⅳ			○	○			昭和62・63、平成2年
9	上山遺跡Ⅰ・Ⅱ	長土呂字上山			○				平成元・3年表調査
10	高山遺跡Ⅰ・Ⅱ	長土呂字下山					○		平成5・6年表調査
11	岡原八人遺跡	長土呂字南下北原				○	○		昭和54年表調査
12	若宮遺跡Ⅰ・Ⅱ	長土呂字若宮			○	○	○		昭和58・平成3年表調査
13	森下遺跡	長土呂字森下		○	○	○	○		昭和63年表調査
14	岡原川B遺跡	長土呂字大豆田、下神田		○	○	○	○		昭和65年表調査
15	岩村四字遺跡	岩村四字觀聖飯			○	○	○		昭和65年表調査
16	清水田遺跡	岩村四字清水田		○	○				昭和63年表調査
17	内高瀬遺跡	岩村四字内高瀬						○	平成元年表調査
18	中原遺跡	岩村四字中原			○				平成9年表調査
19	高瀬新田遺跡	岩村四字新田部					○	○	平成8・9年表調査
20	濁り遺跡	飯原字濁り・丸山		○	○	○	○		平成4年表、水田址

った。同じ枇杷坂遺跡群の南側のNo.15琵琶坂遺跡（北佐久農業高校地点）では標高720mを測るが、この地点からは、弥生時代2棟、古墳時代2棟の住居址が検出され、北佐久農業高校より道を挟んで南の青銅製銅を出土した上直路遺跡も含めて弥生時代からの集落がみられる。

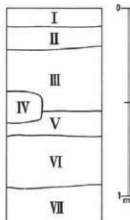
また本遺跡より北側の田切り上には長土呂遺跡群・芝宮遺跡群等古墳から平安時代にかけての大集落跡がある。No.5型原遺跡では90,000㎡にわたる広大な面積の調査により、竪穴住居址975棟・掘立柱建物址860棟が検出され古代集落の復元が可能な遺跡である。芝宮遺跡群も同様で、面積的には大きくないが多くの調査がなされ、古墳時代から平安時代の大集落であることが確認されている。

これらの遺跡群は現在畑地ないし住宅地であるが、南域の現状水田地帯は古代においても水田が営まれ、No.20濁り遺跡では弥生から平安時代までの水田址・水田層が見つかった。

ところで平安時代後葉の下穴虫遺跡と近い時代の住居址は、No.2～9の上久保田向遺跡・曾根新城遺跡・上聖端遺跡・聖原遺跡・南下中原遺跡・上芝宮遺跡・高山遺跡等で検出されている。これらの遺跡は標高720～730m地帯の台地の端部の傾斜地にあり、新しく集落展開する傾向が見られる。



### 第Ⅲ章 基本層序



第4図 基本層序模式図



写真4 基本層序

- 第Ⅰ層 暗褐色土層 (10YR3/3) 耕作土。
- 第Ⅱ層 黒褐色土層 (10YR3/2) シルト質土層。黒色土粒子含む。
- 第Ⅲ層 にぶい黄褐色土層 (10YR5/3) シルト質土層。鉄分による赤錆あり。
- 第Ⅳ層 明褐色土層 (7.5YR5/6) 砂礫層。  
第Ⅲ層中所々に堆積。
- 第Ⅴ層 黒褐色土層 (10YR3/1) シルト質土粒子多量に含む。
- 第Ⅵ層 黒色土層 (10YR1.7/1) ~5mm大のバミスわずかに含む。粘性あり。
- 第Ⅶ層 にぶい黄褐色土層 (10YR6/4) 浅間第1軽石流。~8mm大バミス含む。

地形は北の「蟹沢」に緩く傾斜して低くなっており、台地は浅間第1軽石流が基盤をなしその上に水性堆積層が乗っている。所によって違うが地表から1m近く下に軽石流がある。またその上に堆積しているⅠ~Ⅴ層は場所により厚さが異なり、1遺構でもⅡ~Ⅴ層のいずれもが検出面となっている。遺構は第Ⅵ層まで掘込み、柱穴は第Ⅶ層までいたる。



第5図 発掘区設定図 (1:10,000)

## 第IV章 遺構と遺物

### 1. 竪穴住居址

#### (1) H1号住居址

##### 遺構

本址は調査区中央部にあり、Cウ8グリットにある。H2号住居址を南で切るが、その重複部のプランは同色であるためやや不明確である。

北西隅の西壁に面してカマドを構築し、壁は垂直でなく、形態は不整な隅丸長方形を呈す。長軸600cm短軸328cmで南北方向に長く、確認面から床までの壁の高さは深いところで34cmを測る。主軸はN-9°-Wでいくらか西に振れる。

覆土は黒褐色土(10YR3/2)、上層は細かい小石、下層は3cm大の小石を含む。床面は、堅く締まった所もあるが、全面に渡って把握する事はできず、ことに重複部は床面の検出に精査したが、判明せず、下の住居址の締まった床までさげた。床土は地山のにぶい黄褐色のシルト質ブロックと黒褐色土ブロックの混合土を貼る。



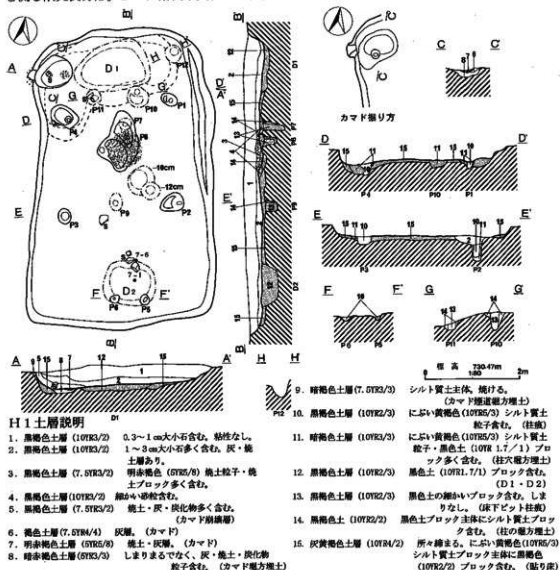
写真5 H1号住居址(南より)



写真6 H1号住居址(西より)

柱穴は主柱穴P1~P4で、堀方の形態は東西に長い楕円で長径34~60cm短径26~40cm深さ20~40cm、柱痕は径14~20cmを測る。床面が全面把握できないため、床下ピットと明確に言えないが、堀方で検出され、覆土も異なることから、P7~P12を床下ピットとした。これらのピットも柱痕を持ち径16~20cmの円形を呈するものが多く、堀方は径24~40cm、深さ24~41cmを測り、細長く深いピットである。

土坑は床下土坑が2個あり、D1はカマドの焚口側にあり、長径260cm短径100cm深さ12cmを測る隅丸長方形。D2は南側中央にあり、長径110cm短径90cm深さ38cmの隅丸長方形である。



第6図 H1号住居址実測図

カマドは検出例の少ない北西隅西壁にあり、煙道部と火床部が残り、袖及び天井部は形状をつかめなかった。長さ100cm幅68cmを測り、火床部には灰・焼土範囲が見られ、煙道上部にシルト質土を貼り、焼け込んでいた。カマドの支脚石は中央に立った状態であり、安山岩（長さ40cm、厚さ10cm）が上面・側面とも面取りされている。

床面中央に径80cmの円形範囲に焼土ブロックと焼土の範囲が見られた。



写真7 H1号住居址カマド（東より）



写真8 H1号住居址カマド堀方（東より）

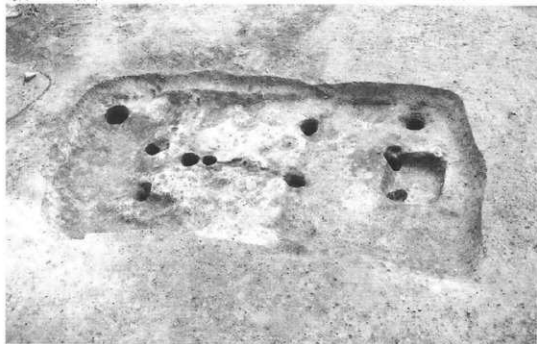


写真9 H1号住居址堀方（西より）

遺物

出土遺物は土器類が主で、灰釉陶器碗の口縁部片、土師質小皿・杯・碗と羽釜・甕、須恵器大甕片、鉄滓2点（P4）が出土している。量は 4,355g と少ない。

小皿・碗類は粉末質の胎土であり、羽釜は比較的口縁部近くに鏝が全周し、やや垂れ気味の鏝が付いている。

灰釉陶器片は輪花の小碗片である。

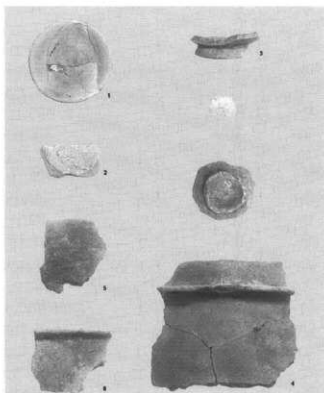
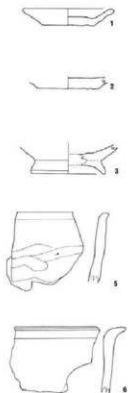
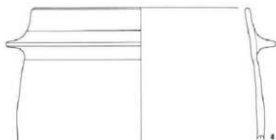


写真10 H1号住居址出土遺物



第7図 H1号住居址出土遺物実測図



## (2) H2号住居址

### 遺構

H1号住居址の南Cい9グリットにあり、北西をH1号住居址、東壁中程と北壁東でD1・D2号土坑に切られている。D1がわずかに床面を破壊するが他の重複は床面より浅く、残存状態は良い。長軸680cm、短軸654cmと大きな竪穴で、北西がでるが隅丸方形を呈する。確認面から床面まで最も深いところで34cmを測る。壁は古代の竪穴住居址の壁と比べ垂直ではなく傾斜しており、ことに上方は緩い斜面になる。主軸方位はN-3°-Eでわずかに東にふれる。

覆土は黒褐色土主体で、床面直上には緻密な粘性のある土が堆積していた。床面はシルト質土・黒色土ブロックの混合土を貼り、縮まっていた。床下からは旧住居址プランを示す落ち込みやピット・旧カマドの焼土範囲があり、拡張してこの大きさにしたようである。

P1~P6の主柱穴があり、3本東西に並ぶ。大きさは、長径36~60cm短径24~50cm深さ26~62cm、柱痕径16~20cmを測る。P7~P13は小ピットで径14~22cm深さ2~36cmを測る。P9・P10は出入り口のピットと推測される。P14~P21は床下から検出され旧住居址に伴うものであろう。P14~P17、P18~21の2組の主柱穴が組めることから2回は建て直しがなされ、3度目の住居が廃絶されたようである。

土坑はD1~D4号土坑を覆土と同じ黒褐色土であることから、生活面に伴うものとした。D2は南東にあり、D2の西にある溝状の飛び出しは、D2に傾斜しており何らかの関連があるものと思われる。

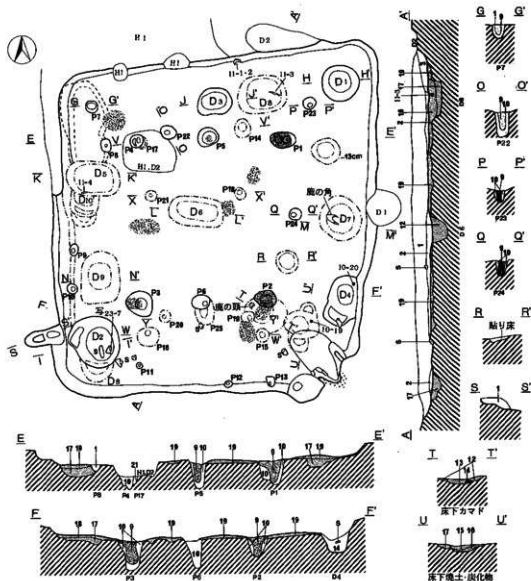
D5~D8は床下土坑、D9・10は床下の旧住居址に伴う土坑であろう。



写真11 H2号住居址（西より）



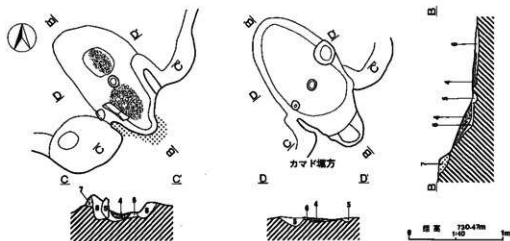
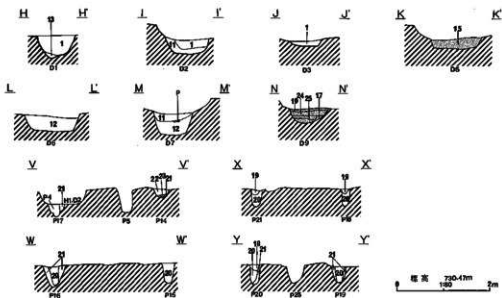
写真12 H2号住居址（主柱穴の側に調査員立つ）



### H2土層説明

1. 黒褐色土層 (10YR2/2) ~5mm大小石含む。
2. 黒褐色土層 (10YR2/3) シルト質土ブロック・粒子含む。粘性ややあり。~2cm大小石含む。
3. 黒褐色土層 (10YR3/2) 上面に薄い焼土層あり。にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト質土 (粘質あり) を含む。
4. 明赤褐色土層 (5YR5/8) 焼土。(カマド)
5. 黒褐色土層 (10YR3/2) 焼土・炭化物含む。(カマド遺方埋土)
6. 黒褐色土層 (7.5YR3/2) 焼七粒子含む。サラサラなシルト質土。炭化物多く含む。(カマド遺方埋土)
7. 暗褐色土層 (7.5YR2/3) 粘土。焼土粒子含む。(カマド跡)
8. 暗褐色土層 (7.5YR3/3) シルト質土ブロック含む。焼ける。(カマド跡)
9. 黒褐色土層 (10YR2/3) 柱状、しまりなし。にぶい黄褐色土粒子 (10YR5/3) 含む。
10. 黒褐色土層 (10YR2/2) にぶい黄褐色 (10YR5/4) ロームブロックと黒色土 (10YR1.7/1) ブロック含む。(ピット埋方埋土)
11. 黒褐色土層 (7.5YR3/2) 焼土ブロック・炭化物多く含む。(D2)
12. 黒褐色土層 (10YR2/2) にぶい黄褐色 (10YR5/4) ロームブロックと黒色土 (10YR1.7/1) ブロック含む。バミス5mm大・炭化物・焼土粒子含む。(D6・D7)

第8図 H2号住居址実測図(1)



13. におい褐色土層(10YR5/4) におい黄褐色(10YR5/4) ロームブロックを貼り、締まる。(D1)
14. 黒褐色土層(10YR2/2) 炭化物・灰・焼土ブロック多量を含む。(D4、灰赤としか。)
15. 黒褐色土層(10YR2/3) 灰黄褐色(10YR4/2) シルト質土ブロック・黒色土(10YR1.7/1) ブロック多く混入。(D5)
16. 黒褐色土層(7.5YR2/2) 焼土・炭化物粒子含む。シルト質土ブロック含む。締まる。(D8)
17. 黒褐色土層(7.5YR2/2) 炭化材・焼土粒子・灰含む。(D8)
18. におい黄褐色土層(10YR4/3) 地山のシルト質土ブロック主体。小石~2cm大含む。締まる。(貼り床)
19. 黒色土層(10YR2/2) 黒褐色土(10YR2/3) に黒色土ブロック含む。やや締まる。(貼り床)
20. 黒褐色土層(10YR2/2) 黒色土(10YR1.7/1) ・におい黄褐色(10YR5/4) ローム粒子含む。しまりなし。(床下ビットの柱痕)
21. 黒褐色土層(10YR2/2) におい黄褐色(10YR5/4) ロームブロック~1cm大含む。(床下ビット難方埋土。)
22. 黒褐色土層(7.5YR2/2) 焼土粒子含む。(P14)
23. 明赤褐色土層(5YR5/8) 焼土(P14)
24. 黒褐色土層(10YR2/3) シルト質土ブロック・黒色土ブロックの混在土
25. 灰黄褐色土層(10YR4/2) シルト質土。

第9図 H2号住居址・カマド実測図(2)





写真13 H2号住居址カマド（北西より）



写真14 H2号住居址カマド堀方（北西より）

カマドは南東の隅カマドで長さ140cm、幅80cmで、煙道と袖の下部が残り、天井部は崩落し、形を残していなかった。カマドの袖は内側に鉄平石を立て、後ろからシルト質土で固めたもので、上部は粘土で覆っている。煙道部下面が良く焼けていた。支脚石はなかったが中央に小ビットがあり、支脚石の跡であろう。

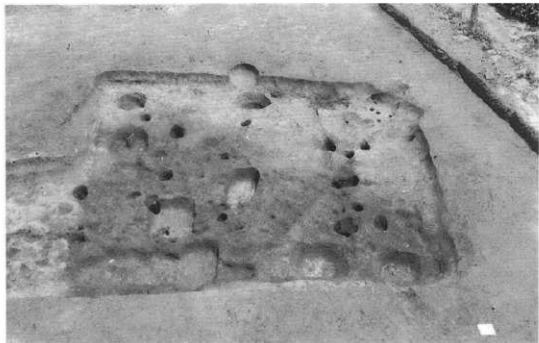


写真15 H2号住居址堀方（西より）

## 遺物

陶器・土器類(11,085g)と鉄製品、鹿の角・鹿の頭部骨・炭が出土している。

陶器・土器類では灰釉陶器碗、須恵器大甕、土師質小皿・杯・碗、羽釜、甕がある。

鉄製品は刀子3点、鎌2点、鉄塊1点、鉄板1点、鉄滓1点がある。

鹿の角は頭部から切断された跡だけではなく、角の途中で切断痕がある。鹿の頭部骨がカマドの焚き口付近で出土し、鹿の頭部は角を切り取った痕跡を残している。同様の鹿の角を切断し、加工した例が本遺跡の北隣の長土呂遺跡群上高山遺跡Ⅰ・Ⅱで出土している。

炭火物は堅炭片であろうか燄片が出土している。

本址は規模も大きいのが、遺構では土坑・焼土範囲が多いこと、遺物では鉄製品・同一個体の鹿の頭骨と角が出土、角を加工していることが注目される。角は切断して刀子の柄に利用したよである。(注：西本豊弘氏による。)



写真17 鹿の角出土状態 (D7)



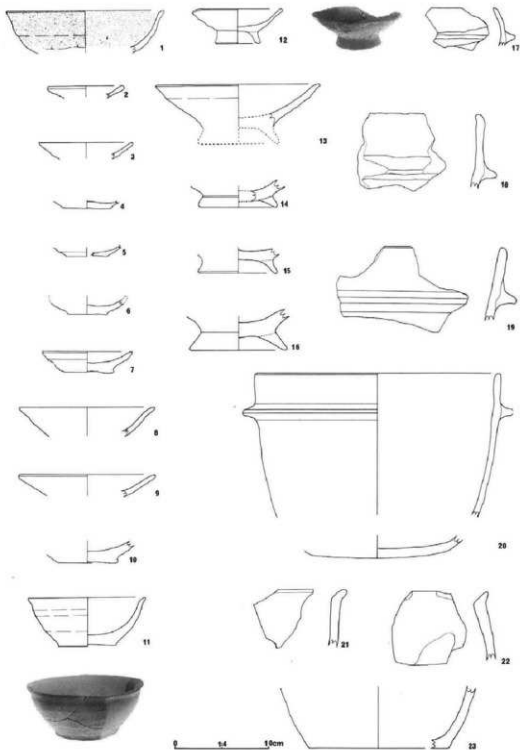
写真16 壁に付いて出土した2丁の鉄鎌



写真18 刀子出土状態 (11-4. D5)



写真19 刀子出土状態 (11-3. D8)



第10图 H2号住居址出土遗物实测图(土器)

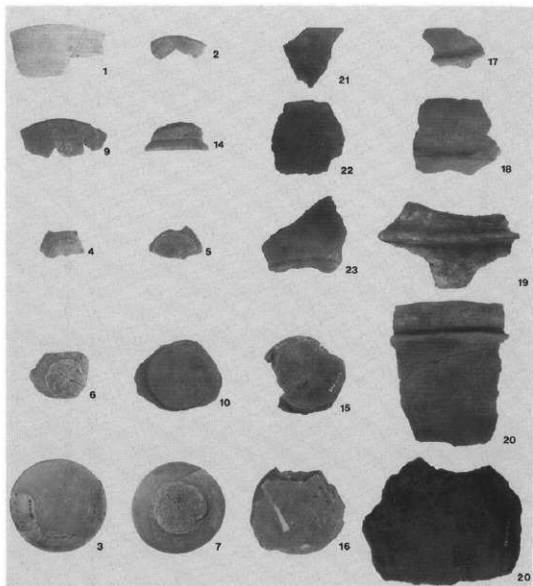


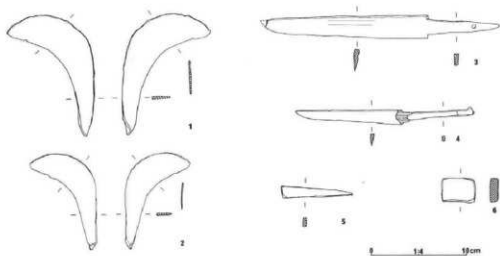
写真20 H2号住居址出土遺物(土器)



写真21 鹿の頭骨(カマド焚口出土、約 $\frac{1}{2}$ )



写真22 鹿の角(D7出土、約 $\frac{1}{4}$ )



第11図 H2号住居址出土遺物実測図(鉄製品)

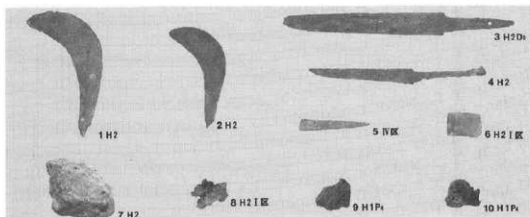


写真23 H2号住居址出土遺物(鉄製品・鉄塊・鉄滓、9・10はH1号住居址より出土、約 $\frac{1}{4}$ )

第2表 H2号住居址内土坑計測表

構造名	位置	規模(長さ・短径・深さ)(cm)	形 態	特徴及出土遺物
1	北西隅	76×74×39	円形	底面をロームブロックで貼る。
2	南東隅	110×104×37	円形	下層に焼土ブロック・灰化物を含み、鉄塊出土。
3	北端中央	70×56×42	楕円方形	
4	南端	110×64×36	円形に裏より出し付く	灰化物・灰・焼土ブロックの多量を含む、段を隔る穴か。
5	北西	112×64×74	楕円長方形	土下土坑、刀子出土。
6	中央	130×60×36	楕円長方形	
7	東中央	96×80×51	円形	土灰中位より覆の角出土。
8	北端東	127×80×26	楕円長方形	刀子出土。
9	西端南	119×82×32	楕円長方形	
10	西端中央	60×40×9		Dに切られる。

### (3) H3号住居址

#### 遺構

H3号住居址は取り付け道路の工事中に、カマドの先端が道路の北端にかかり発見された。工事区間内の破壊される所、ちょうどカマドの先端のみの調査となったため住居址の規模・形態はわからない。H1号住居址の西隣Dエ1グリットで検出された。南東にカマドを持つ方形の住居址と推定される。

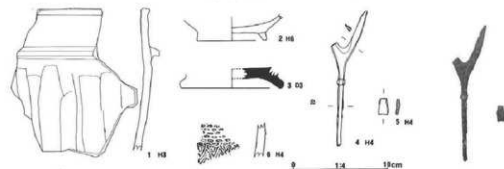
カマドは住居址の南東隅カマドで、安山岩の割石を袖の芯材として使用し構築している。カマドの火床には焼土・灰が残っていた。



第12図 H3号住居址実測図

#### 遺物

羽釜と須恵器の大甕胴部片がカマド内より出土している。



第13図 H3、H4・6 (試掘)号住居址、D3号土坑出土遺物実測図



写真24 H3号住居址カマド (南より)



写真25 H3号住居址カマド掘り方 (南より)

## 2. 土坑

### (1) D1号土坑

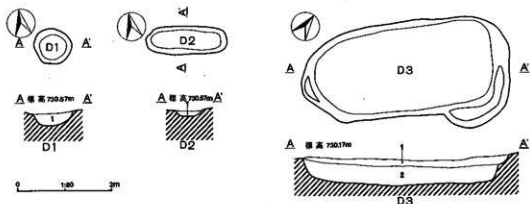
H2号住居址東壁中央をわずかに切り、Cい9グリットにある。長径84cm、短径72cm、深さ28cmの円形の土坑である。覆土は黒褐色土で、遺物は出土していない。

### (2) D2号土坑

H2号住居址の北壁東側を切り、Cい9グリットにある。長径172cm、短径60cm、深さ16cmの長楕円形を呈す。覆土は黒褐色土で、遺物は出土していない。

### (3) D3号土坑

H1号住居址の北西Cえ8グリットにある。長径448cm、短径240cm、深さ72cmの隅丸長方形の北東コーナーに幅140cm、長さ40cmの楕円形の張り出しが付いている。深さ24cmを測る。張り出し部の底面は締まっていないが土坑の底面は締まっていた。覆土は2層の黒褐色土で、上層にはシルト質土、下層にはロームブロックが含まれている。遺物は羽釜片と須恵質椀の底部が出土している。ピットは検出されなかったが中世の堅穴状遺構と類似している。



#### D1土層説明

1. 黒褐色土層 (10TR2/3) 地山の灰黄褐色 (10TR4/2) シルト質土粒子含む。小石もまれに含む。

#### D2土層説明

1. 黒褐色土層 (10TR3/2) 1mm大パミス・地山の黒色土 (10TR2/2) ブロック含む。

#### D3土層説明

1. 黒褐色土層 (10TR2/3) 黒色土 (10TR1.7/1) ブロック・灰黄褐色土 (10TR4/2) シルト質土粒子含む。
2. 黒褐色土層 (10TR2/3) 黒色土 (10TR1.7/1) ブロック・にぶい黄褐色土 (10TR5/4) ロームブロック・パミス多く含む。

第14図 D1・D2・D3土坑実測図



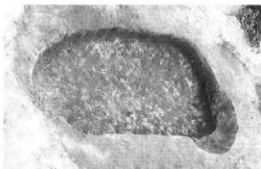
写真26 D1号土坑半截（南より）と完顔（北より）



写真27 D2号土坑半截（東より）と完顔（北より）



写真28 D3号土坑半截（南西より）と完顔（南より）

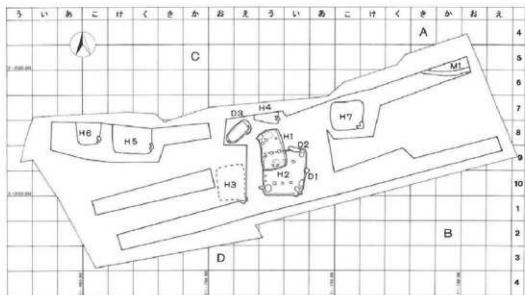


### 3. その他

試掘調査のプラン確認のみで埋め戻したH4～H7号住居地の4棟の住居地も南東隅近くにカマドを持ち、羽釜や土師質の杯、灰釉陶器杯片等を出土している。これらに重複関係はなく、H2号住居地と時間差はないものと思われる。



## 第V章 総 括



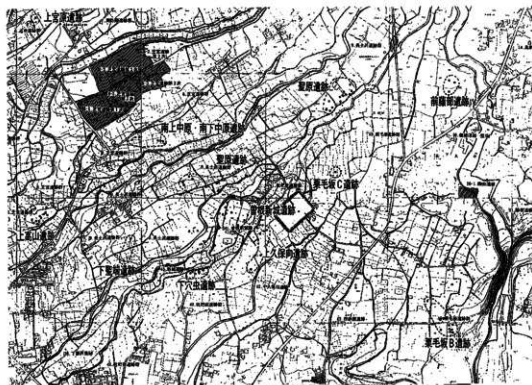
第15図 下穴虫遺跡Ⅰ全体図 (1:600)



写真20 下穴虫遺跡航空写真 (朝日航洋社, 1997. 7. 14撮影)

下穴虫遺跡は、試掘調査を含め7棟の住居址を検出し、新旧の重複はH2号住居址とH1号住居址のみである。H1号住居址を除きカマドの位置が南東隅であること、検出面からの土器片などからほぼ同時期の集落と考えられる。土師質の小皿や羽釜の存在からは平安時代後葉の11世紀後半の年代が当てられよう。H1号住居址が重複しH2号住居址より後出する事は明らかであるが、出土土器からは明確な時間差は看取されない。

また周辺域の南東カマドを持つ竪穴住居址を拾い出し、ほぼ同期の集落としてみた。中に重複があるのですべてが同期ではないが、土師質小皿、羽釜を持つ11世紀後半頃の集落をつかむことができた。12世紀代の竪穴住居址が作り付けのカマドを持たない中世の竪穴建物址に変わって行く明確な時期はわからない。しかし、形態はおそらく小田井の前籐部遺跡において検出されているカマドは持たないが貼り床し、床が斜めにあがり壁になっていく竪穴建物址になっていくものと推測される。11世紀の集落がそれ以前の集落から一部は重なりながら、台地の傾斜地へ移っており、新たな村がこの頃構成されたようだ。この集落の検出される地点は台地の中でも周辺部の傾斜地に立地している。聖原遺跡では台地の調査が全面的になされ古墳から平安時代の竪穴住居址が1,000棟近く検出されているが、該期の竪穴は30棟未満である。平安時代末のころの集落の分布がつかめたものと思う。この集落を繋ぐ道も想定できる可能性がある。



第16図 下穴虫遺跡を中心とした11世紀後半期の集落分布図 (1:16,500)

## 下穴虫遺跡出土シカ骨

群馬県立大間々高校教諭 宮崎 重雄

本遺跡は佐久市（岩村田）にあり、シカ角は平安時代末期の住居址から出土したものである。

1. シカの成獣の脳頭蓋片で前頭骨・角座骨、後頭骨からなる。角は角座骨基部で切り取られている。前側～内側から鋭い刃物により何度も切り込まれ、角座骨の1/2～1/3くらい至ったところでもぎ取っている。

左右の角の中心間の距離は102.7mmで、現生足尾産のオスのシカより大きい。

2. 右角で、角座の直上で切り取っている。第1枝はこの角の近位切断面から149.0mmのところ、角幹は近位切断面から276.0mmのところにある第2枝分岐部で切断されている。

近位切断面の径は前後径が44.6mm、左右径が36.6mm、第1分岐部と第2分岐部間の角幹の径は前後が31.9mm、左右径が45.0mmである。かなり大型の角で、現生のニホンシカでもこれほどの角をもっている個体は少ない。

3. 長さ47.4mmで切り取られた上記の右角の第1枝先端部である。基部の径は17.2×16.7mmである。

4. 各幹部の破片で、保存最大長62.2mmである。角の周囲の緻密質部分は風化によって失われている。角幹の径は30.8×27.5mmである。片側の切断面はドーム状の形に加工されている。

以上の脳頭蓋片と2及び3のシカ角は同一個体のもと思われる。

古代の住居址からシカ角の出土している例は群馬県子持村白井遺跡（7～8世紀）がある。

51号住居址を例に挙げると、シカ角は4片出土していて、このうちの一つは第1分岐部で切断されている右落角で、もう一つは角座の直上・直下で切り取った円盤状の角座部であり、ほかの二つは上・下端を切り取った円筒状の角幹部である。

49号住居址では角座骨基部で角の切り取られた右前頭骨が、56号住居址では角座の上下で切り取られた9cmほどの長さの角片が出土している。

下穴虫遺跡との切断部分の共通性は、各幹部を円筒状に切っていることや角座骨基部での切断例で、第2分岐での切断例・角座直上での切断例は白井遺跡にはない。

### 参考・引用文献

上條雍彦(1985)「図説口腔解剖学—骨学(頭蓋学)」p384, アナトーム社, 東京。

宮崎重雄(1994)白井二位屋遺跡の獣骨類「白井遺跡群—集落編I—(白井二位屋遺跡)」

建設省・群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団。290-297

引用参考文献

- 1991長野県埋蔵文化財センター『上信越自動車道埋蔵文化財報告書2-佐久市内その2-』  
 1992佐久市教育委員会『国道141号線関係遺跡』-近津遺跡群上宮原遺跡  
 1993佐久市教育委員会『上久保田向Ⅳ』  
 1993佐久市教育委員会『南中原・南下中原』  
 1994佐久市教育委員会『上久保田向Ⅲ』  
 1994佐久市教育委員会『曾根新城遺跡Ⅴ』  
 1995佐久市教育委員会『曾根新城・上久保田向・西曾根』

第3表 下穴虫遺跡鉄製品計測表

挿図番号	出土位置	種類	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	備考
11- 1	H2 壁	鎌	12.8	3.6	0.3	42.78	
11- 2	#	鎌	10.1	3.0	0.25	21.42	
11- 3	H2D8	刀子	24.6	2.5	0.6	91.90	先端欠損
11- 4	H2D5	刀子	18.75	1.6	0.5	21.73	
11- 5	H2IV区	刀子	7.5	1.25	0.3	8.69	
11- 6	H2I区	不明	3.6	1.95	0.9	45.53	
11- 7	H2D2	鉄塊	8.3	5.5	4.1	259.86	
8	H2I区	鉄滓	3.2	2.9	1.9	30.06	
9	H1P4	鉄滓	3.8	2.8	2.3	31.01	
10	H1P4	鉄滓	3.9	3.0	1.4	19.66	
13- 5	H3	鉄線	14.4	2.5	0.7	19.92	
13- 6	#	刀子	1.7	2.35	0.4	2.54	

第4表 下穴虫遺跡土器観察表

H1号住居址

挿図番号	種別	口徑 底径 高さ	残存状態	調査箇所	色 質	胎 土	備 考
7-1	土師質 小皿	1.5 1.4 1.8	口縁2/3・底面残存 完全実例	口縁部 内外裏ロク口横ナデ 底部 回転糸切り	じいれ褐色 T.6T8/4	粘土質で細かい、 まれに粗かい砂粒含む。	II区出土。
7-2	土師質 杯	— 1.3 1.8	底部1/2残存 回転実例	口縁部 内外裏ロク口横ナデ 底部 回転糸切り	じいれ褐色 T.6T8/4	粘土質で細かい、 1m大の砂粒含む。	II区出土。
7-3	土師質 鉢	— 3.2 3.8	口縁部1/3残存 回転実例	内外面 ロク口横ナデ	じいれ褐色 T.6T8/3	粘土質で細かい、 まれに砂粒含む。	III区割取り音く。
7-4	土師質 酒壺	11.2 14	口~胴部1/3残存 回転実例	内外面ナデ	暗赤褐色 JTB/2	1m以下下部の褐色な 石質砂子多く含む。 まれに赤褐色含む。	口縁部近くに脚付く。 カマド・II区出土。
7-5	土師質 壺	—	口~胴部1/10残存 部分実例	口縁部 内外裏横ナデ 胴部外面 縦方向ヘラナデ 胴部内面 縦方向のヘラナデ	黒褐色 T.6T8/1	1m以下下部の褐色な 石質・黒色粒多く含む。	II区出土。
7-6	土師質 壺	10 7	口~胴部1/8残存 部分実例	外面口縁部 ハケ目押し横ナデ、胴部 縦方向のナデ。内面口縁部 縦方向の 3方糸。胴部 ハンテ目押し横ナデ	じいれ赤褐色 T.6T8/4	石英・長石粒散れ砂粒 少々含む。	II区出土。



佐久市埋蔵文化財調査報告書

- |                                |                           |
|--------------------------------|---------------------------|
| 第1集 『金井城跡』                     | 第30集 『市内遺跡発掘調査報告書1992』    |
| 第2集 『市内遺跡発掘調査報告書1990』          | 第31集 『山法師遺跡A・筒村遺跡A』       |
| 第3集 『石附築址Ⅲ』                    | 第31集 『山法師遺跡A・筒村遺跡A』       |
| 第4集 『大ふけ』                      | 第32集 『東ノ割』                |
| 第5集 『立科F遺跡』                    | 第33集 『聖原遺跡Ⅶ・下曾根遺跡Ⅰ・熊鷹遺跡Ⅰ』 |
| 第6集 『上曾根遺跡』                    | 第34集 『西一本柳遺跡Ⅰ』            |
| 第7集 『三貴墳遺跡』                    | 第35集 『市内発掘調査報告書1990』      |
| 第8集 『瀧の下遺跡』                    | 第36集 『蛇塚B遺跡Ⅲ』             |
| 第9集 『信濃141号線関係遺跡』              | 第37集 『西一本柳遺跡Ⅱ中西ノ久保遺跡』     |
| 第10集 『聖原遺跡Ⅱ』                   | 第37集 『西一本柳遺跡Ⅱ中西ノ久保遺跡』     |
| 第11集 『赤塚垣外遺跡』                  | 第38集 『南下中原遺跡Ⅱ』            |
| 第12集 『若宮遺跡Ⅱ』                   | 第39集 『中屋敷遺跡』              |
| 第13集 『上高山遺跡Ⅱ』                  | 第40集 『寺畑遺跡』               |
| 第14集 『栗毛坂遺跡』                   | 第41集 『曾根新城Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ』      |
| 第15集 『野馬久保遺跡』                  | 上久保田向遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ・Ⅳ・Ⅶ          |
| 第16集 『石並遺跡』                    | 西曾根遺跡Ⅱ・Ⅲ                  |
| 第17集 『市内遺跡発掘調査報告書1991』 (1月～3月) | 第42集 『寄山』                 |
| 第18集 『西曾根遺跡』                   | 第43集 『権現平遺跡』              |
| 第19集 『上芝宮遺跡』                   | 第44集 『寺派遺跡』               |
| 第20集 『下聖崎遺跡Ⅲ』                  | 第45集 『市内遺跡発掘調査報告書1994』    |
| 第21集 『金井城跡Ⅲ』                   | 第46集 『囃り遺跡』               |
| 第22集 『市内遺跡発掘調査報告書1991』         | 第47集 『上芝宮遺跡Ⅴ』             |
| 第23集 『南下中原・南下中原遺跡』             | 第48集 『池端城跡』               |
| 第24集 『上聖崎遺跡』                   | 第49集 『根々井芝宮遺跡』            |
| 第25集 『上久保田向Ⅳ』                  | 第50集 『藤原遺跡Ⅲ』              |
| 第26集 『藤原古墳群・藤原Ⅱ』               | 第51集 『寺中遺跡・中屋敷遺跡』         |
| 第27集 『上久保田向Ⅲ』                  | 第52集 『坪の内遺跡』              |
| 第28集 『曾根新城Ⅴ』                   | 第53集 『四正坊遺跡』              |
| 第29集 『山法師遺跡B・筒村遺跡B』            | 第54集 『市内遺跡発掘調査報告書1995』    |
| 第30集 『聖原遺跡X』                   | 第55集 『善勝前遺跡』              |
|                                | 第57集 『高師町遺跡Ⅱ』             |

佐久市埋蔵文化財調査報告書第58集

下穴虫遺跡Ⅰ

1998年3月

編集・発行 佐久市教育委員会

〒384-01長野県佐久市大字中込3056

埋蔵文化財課

〒385 長野県佐久市大字志賀5953

TEL(0267)68-7321

印刷所 株式会社 中信社

